

1 本レポートのハイライト

1.1	本レポートの対象と30by30への貢献	8
1.2	足柄・富士宮の自然	8
1.3	足柄・富士宮における自然関連情報の分析結果	10
1.4	足柄・富士宮の取り組みと今後の方針	11

1 本レポートのハイライト

1.1 本レポートの対象と30by30への貢献

富士フィルムグループは、前述の方針に沿ったさまざまな環境の取り組みを実施しており、この活動を生物多様性の保全におけるグローバル目標である30by30^{※4}の貢献につなげていくために、保全活動とその実施区域を自然共生サイトとして登録する検討を2023年より開始しました。その候補地として当社の創業の地であると同時に水の使用量がグループ内で最大規模となる神奈川事業場 足柄サイト（以下、足柄サイト）、ならびに富士宮事業場を選定し、両拠点において工場の操業に直接関係し保全活動の対象としてきた森林や河川などの区域を対象に、専門家の協力を得て生物多様性調査を実施したところ、豊かな生態系の存在が立証されました。その結果をもって令和7年度の地域生物多様性増進法に基づく保全活動とその実施区域（自然共生サイト）として認定申請を行い、2025年12月16日、足柄は「富士フィルム 湧水の森林（もり）」として、富士宮事業場は「癒しの小径（こみち）」として正式に自然共生サイト認定につなげることができました。認定に至る過程において、両工場の操業活動と周辺の自然との関係性を整理するためTNFDのLEAPアプローチによる調査分析を並行して実施しており、本TNFDレポートにおいてその分析結果を開示します。

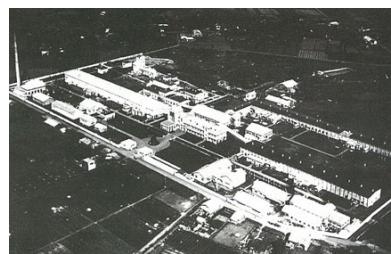
1.2 足柄・富士宮の自然

1.2.1 足柄サイト

足柄サイトは1934年に写真感光材料の生産に必要な大量の良質な水ときれいな空気を求めて当時の南足柄村（現神奈川県南足柄市）に設立され、富士写真フィルム（現富士フィルムホールディングス）の創業の地となりました（当時は足柄工場）。以来、当サイトでは当地に湧き出る水を使用し、国産初の映画用ポジフィルムをはじめ、印刷用フィルム、乾板、印画紙などの多くの感光材料を生産してきました。事業の多角化とともに当サイトで生産される品目も変化してきていますが、引き続き水を使用しており、研究所や化学物質の安全性を評価する安全性評価センターなども併設する当社の主要拠点として位置付けられます。

足柄サイトは箱根外輪山の麓に位置し、周囲にはシラカシ、ケヤキなどの広葉樹から成る二次林と、スギ、ヒノキによる森林が広がり、足柄サイトが管理する社有林もその一部として構成されています。これらの森林を中心にフクロウ、ムササビといった樹洞をすみかとする種や、里地里山に生息する動植物種から成る生態系が広がっています。この生態系は、箱根外輪山を上流とする河川や地下水による水資源によって支えられています。自然共生サイト「湧水の森林（もり）」は、工場に近接する上述の社有林を中心とする森林の中にあり、第一と第二に分けられる二つの水源に代表される湧水スポットが存在しています。中でも第二水源にある清左衛門地獄池は箱根ジオパークにおける「ジオサイト」に位置付けられ、その湧水は「平成の名水百選」に選定されています。

足柄サイトは、現在ではインスタントフィルムなどの写真感光材料以外にも複数の事業製品を生産しており、自然共生サイトを中心に周囲の自然から提供される湧水を生産に使用しています。創業以来、水を重要な自然資本と位置付けており、この水源を維持するために、社有林を中心とする工場周辺の森林を地域のステークホルダーとともに守ってきました。自然共生サイトにおいて認定の対象となった活動計画は、水源涵養林の保全が中心となっています。



足柄工場（1934年）



足柄サイト（現在）

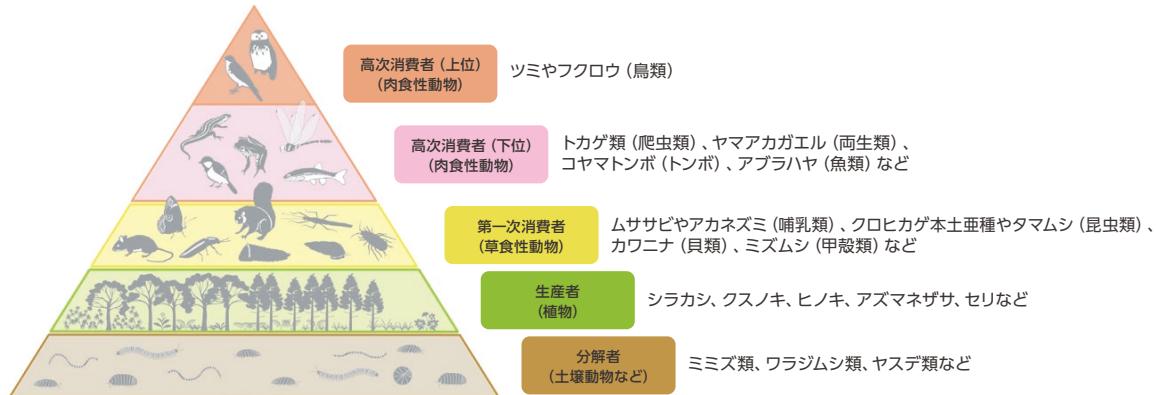


湧水の森林（もり）の樹木



第二水源 清左衛門地獄池

「湧水の森林（もり）」の生態系ピラミッドのイメージ



「湧水の森林（もり）」は、二次林や植林で構成される森林の中に複数の湧水が存在し、豊かな水資源に支えられ多様な生物種が存在しています。湧水池の水辺、林床や樹木までさまざまな場所に里地里山の動植物が生息し、樹洞を巣とするフクロウなどの肉食性動物を頂点とする生態系ピラミッドが構成されています。

1.2.2 富士宮事業場

富士宮事業場は世界遺産である富士山の南西山麓に位置し、豊富な湧水を利用できる地に印画紙用のパライタ紙とその原紙の生産工場として1963年に開設されました（当時は富士宮工場）。以来、当事業場では当地に湧き出る水を使用し、紙製品やPETフィルムを基材とするフィルム製品などの生産を担ってきました。



富士宮工場（1965年）



富士宮事業場（現在）

富士宮事業場は、富士山からの地下水に由来する湧水が豊富な地域に位置し、工場内の複数箇所から湧き出る冷涼な水は敷地内を流れる清水川に合流し、清流に植生するカワヅシャやバイカモなどの水草や藻類を育み、カジカ、カワヨシノボリなどの魚類、カモ類、サギ類などの鳥類から成る河川を中心とした豊かな生態系を形成しています。また敷地内の清水川沿いの緑地に植生する林は照葉樹から成る自然林に近い様相を呈しており、林床にはキンランなどの希少な植物が植生し、里地里山に生息する動植物種も確認されました。2006年にこの林の中に清水川に沿った遊歩道を整備し、従業員らにより「癒しの小径」と命名されました。構内でありながら豊かな自然を感じることができる従業員の憩いの場として親しまれており、工場見学を通じた多様なステークホルダーとの交流の場にもなってきました。

富士宮事業場は、現在ではX線フィルムなどの各種機能性フィルムを生産しており、自然共生サイトを中心とした湧き出る豊富な水資源を生産に使用しています。また水の利用と同時に、地域環境に配慮して、生産に使用した後の排水は工場内の処理施設において規制で求められる以上の水質基準を達成する浄化処理を行った上で自然に還元するとともに、毎年500名規模を動員し周辺河川の清掃活動を展開しています。自然共生サイト「癒しの小径（こみち）」において認定された活動計画は、清水川と水辺の遊歩道の生態系の維持保全を対象としており、これを社員の参加型活動を中心として推進していきます。



構内を流れる清水川

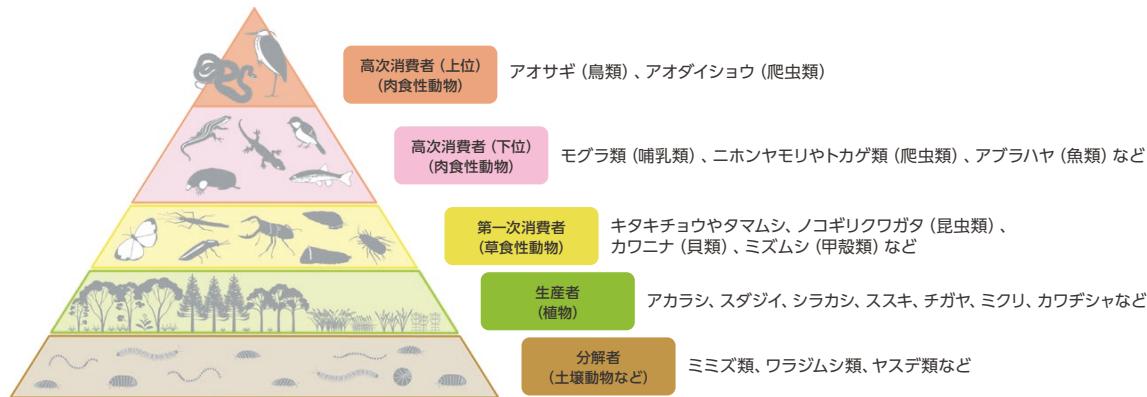


清水川に流れ込む湧水



清水川沿いの樹林と遊歩道

富士宮サイト「癒しの小径（こみち）」の生態系ピラミッドのイメージ



「癒しの小径（こみち）」は、清涼な湧水が合流し豊かな水を湛える清水川を中心とした生態系の中にあります。水中や川沿いの樹林の林床にはさまざまな生物種が生息しており、それらを捕食するために隣から飛来するサギなどの肉食性動物が生態系ピラミッドの頂点に立っています。

構内を流れる清水川周辺で観測された動植物



バイカモなどの水草



カジカ



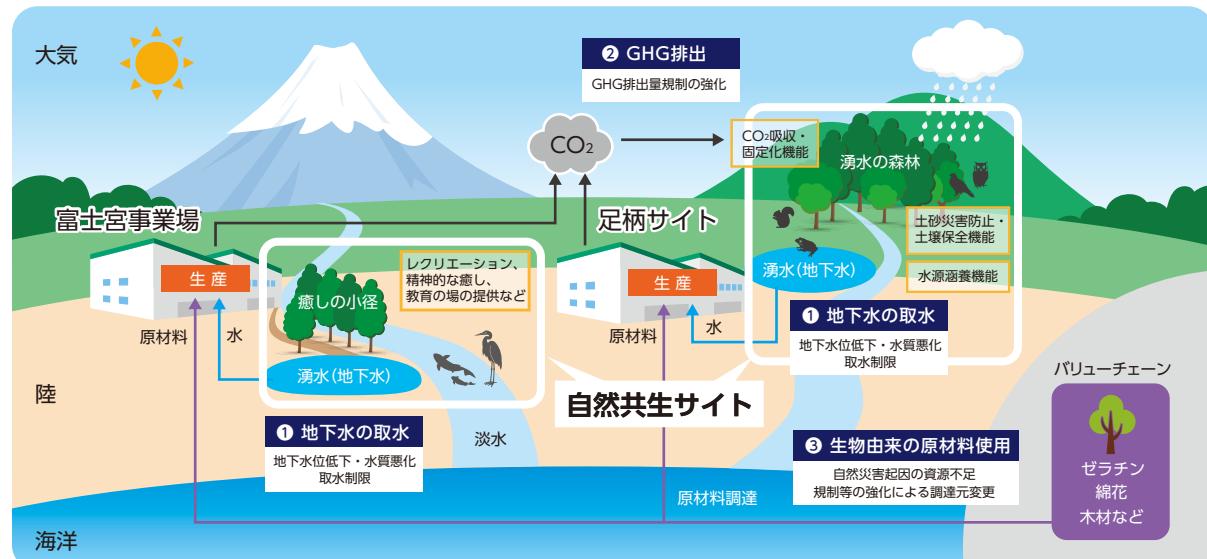
コサギ

1.3 足柄・富士宮における自然関連情報の分析結果

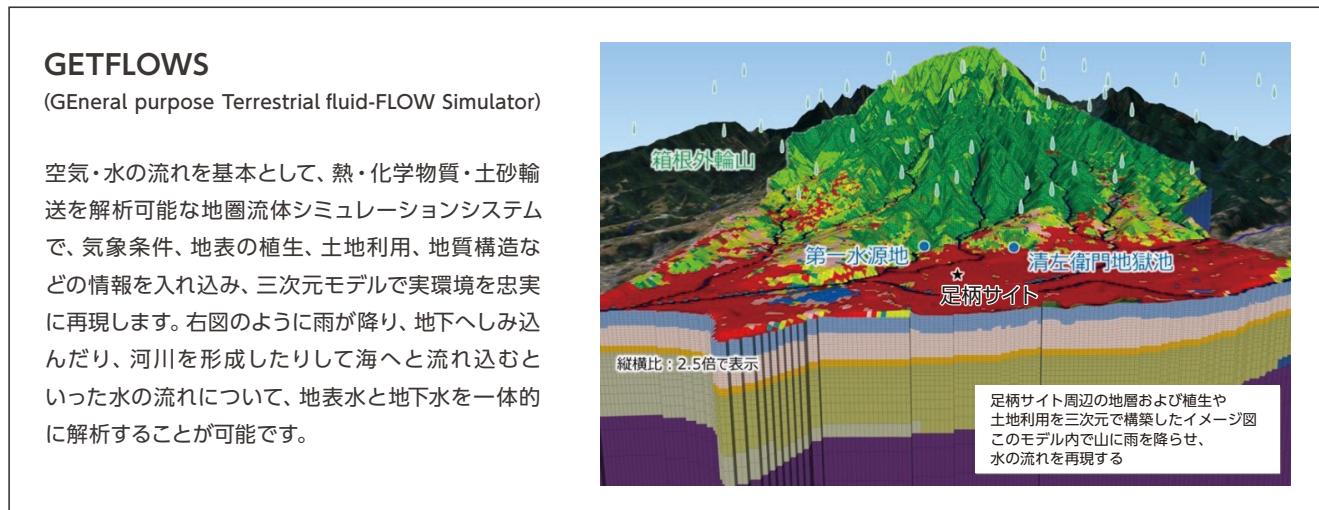
LEAPアプローチに基づくTNFD分析により、足柄サイト、富士宮事業場の両拠点における操業と自然への依存・インパクトの把握を行い、リスクとなり得る操業上の主な要因として以下①～③の3点を特定しましたが、全体の分析評価を通じた結論として、これらのリスクの解消に向けた有効な施策が取られていることを確認しました（詳細は2.1.2、2.1.3に記載）。

- ①地下水の取水
- ②GHG排出
- ③生物由来の原材料の使用

足柄・富士宮拠点におけるリスクとなり得る要因と自然共生サイトの機能



特に①に関して両工場は取水量が多く、水資源への依存・インパクトが大きいことを踏まえ、拠点周辺の地域における水の供給性や操業との関係性を水循環シミュレーションシステムGETFLOWS(株式会社地圏環境テクノロジー提供)によって分析を行いました。その結果、足柄サイトで使用する地下水は周辺の社有林およびさらに上流の山林から供給されていること、当社による取水が周辺地域の水の供給性に過剰な影響を与えていないこと、水源周辺の社有林を中心とする森林保全の活動を通じた水源涵養機能を通じて、地域の水の供給性の維持や、土砂災害の抑止などの機会創出に貢献していることが分かりました。また富士宮事業場では、富士山を上流とする豊富な地下水が、富士宮事業場周辺地域の地層の特性により事業所周辺において湧き出やすい構造にあり、水の枯渇リスクは極めて低いことが分かりました。



1.4 足柄・富士宮の取り組みと今後の方針

前述の分析結果を踏まえ、両工場の操業活動における潜在的なリスク要因にひも付く課題と対策を下図のように整理しています。これらの対策はすでに着手している内容もありますが、今後継続的に推進し強化を図っていきます。

特に、自然共生サイトにおける森林や河川の保全活動は、地域の水資源を守り環境や社会の持続可能性にも資すると同時に、30by30のGBF(昆明・モントリオール生物多様性枠組)目標にも貢献し得る施策となります。足柄の「湧水の森林(もり)」では、水源涵養林における混交林化や、鳥獣害対策による希少在来種の保護などの活動によって生物多様性の保全を拡大・推進していきます。富士宮事業場の「癒しの小径(こみち)」においては、河川の保全や希少在来種の保護などを進めるとともに、地域住民や学生などのステークホルダーの工場見学受け入れの際の共生サイトツアーを通して、自然を通じた文化的サービスの提供も行っています。

